

被災当事者の「生活経験の語り」に関する レジリエンスの構成要件の検討

～東日本大地震の被災者S氏の「語り」の記録を手がかりとして～

A study of the pre-conditions for resilience:

The narrative of a disaster victim

- Clues from the records from the experiences of Mr. S,
a victim of the Great East Japan Earthquake

結城 俊哉

YUKI Toshiya

要約

本研究は、震災の被災者自身の震災体験をめぐるライフ・ストーリー（life story）を質的研究として取り扱う。研究方法としては、生活経験の「語り（ナラティヴ）」の記録について質的分析を実施した。そして、本事例におけるレジリエンスの構成要件を明らかにしたものである。本論において、その構成要件として次の5つを抽出した。1. 自己効力感及び自己肯定感がもたらす成長。2. 地域文化（郷土）への愛着心の自覚化。3. 当事者である仲間意識（連帯感）の共有化。4. ケアする共同体意識の獲得。5. 自己の成すべき使命・役割（ミッション）の意識化。そして、この5つの構成要件について、レジリエンスとその意義について考察した。

キーワード：東日本大震災、ストレス、ナラティヴ、レジリエンス、ソーシャル・キャピタル、
レジリエント・コミュニティ

Abstract

This qualitative study examined a record of the experiences of a victim of the Great East Japan Earthquake investigating a narrative of their memories of the disaster. From an analysis of the data it became apparent that the victim of the disaster displayed pre-requisites for resilience, with five factors were found to be necessary conditions, namely: 1. Growth brought about by self-affirmation and self-efficacy. 2. An awareness of an attachment to their local culture. 3. A shared sense of solidarity and comradeship. 4. Acquisition of a sense of community care. 5. An awareness of duty and role. The study discussed resilience and its significance in relation to the above five pre-requisites.

Key words: Great East Japan earthquake disaster, stress, narrative, resilience, social capital, resilient community

1. はじめに

1. 問題の背景と所在

あの「3.11東日本大震災」から今年（2014年）で3年が経過した。本論文で取り扱うテーマとして震災被災者自身が自らの震災体験をめぐるライフ・ストーリー（life story）として物語った〈生活経験の語り〉の記録を手がかりとしながら、ある被災者自身が災害（地震・津波）という未曾有の経験を通して、危機的状況乗り越え、立ち上がる力の覚醒をもたらしている「レジリエンス（resilience）」と呼ばれる「逆境力・回復力・立ち直る力」の構成要件とその本質とは何かについて検討し、被災地で生きる生活者への支援を考える手がかりを提示してみたい。

2. ストレス研究としての発達論から外傷後成長としてのレジリエンスへ

従来から、ストレス学説の提唱者であるカナダの生理学者セリエ, H. (Selye, H.)⁽¹⁾によれば、ストレスには、「有益ストレス（eustress）」と「有害ストレス（distress）」があることが示され、ストレスは、身体の生理的な変化に現れていることが提示された。そして、日常生活上のストレスサーについて、大災害がもたらすストレスについて次の様に述べている。

各種の不幸と大災害の、とくに爆撃、地震、洪水、戦争、竜巻あるいは事故後の極端な情緒障害などの心理的結末は、そのストレスサーに原因があると思われる共通の因子を持っている。これらは、不安逃避、驚愕性立ちすくみ、無感動、うつ状態、従順依存性、強迫興奮性と呼ばれている。科学的研究から、大災害中の行動をはじめ、そのような危機における不合理な行動に対する防護手段への示唆も知られているが、純粋に医学的な観点、とくに疑いもなくストレスに結びつけられる生化学的な知見は余りない。 [セリエ (=1988) p.353]

このように、セリエは、医学・生理学者としての当時の知見からも、大災害がもたらすストレスによる心身の生体反応については知られていたが、行動科学及び、生化学的な知見についてそのストレスとの関係を示すものが当時は未だに少ない状況にあったという現状について述べている。しかし、その後のストレス研究の発展は目覚ましく、心理学分野を中心にストレス・レベルの測定からコーピング（coping）としてのストレス・マネジメント研究とストレスと社会環境の中に生きる人間との相互作用の管理方法へと研究が幅広く展開されている。

さらに、この点について、青年期をめぐるアイデンティティ論で知られるエリクソン, E. H. (Erikson, E. H.) (1963) の初期の著作『幼年期と社会』の中で展開した「人間の8つの発達段階」⁽²⁾の中において、各発達段階に訪れる危機（クライシス）状況乗り越えることで人格の成長発達を人生のライフ・サイクル全体をとおして展開することについて提唱したことは特に知られている。

さらに、近年ストレス研究の最近の動向に着目すると、宅 香葉子 (2010) による「外傷後成長理論 (PTG: Posttraumatic Growth)」⁽³⁾が注目される。宅によれば、「外傷後成長」とは、「外傷（ト

ラウマ) 的なストレス体験、つまり非常に困難な人生上の危機：災害・事故・大切な人（家族等）の死・辛い出来事と、その後の苦しみ（悲嘆等）をとおして、自己の心理的な成長が促進される結果とその過程（プロセス）のことである、として青年期におけるストレス体験が及ぼす自己変容についての研究から導き出している。

3. レジリエンスの定義をめぐって

本論では、このような従来からの心理学的ストレス研究の視点を援用しつつも、人が災害（地震・津波被害）を受けた地域（コミュニティ）で生きる姿の変容を検討する。

換言するならば、被災した自己が、地域社会・文化と向かい合いながら生きるまさに、カストロフィを経験した人間の〈生の語り〉を手がかりに、レジリエンスと呼ばれる「ストレスを跳ね返し、逆境を生き抜く力（逆境力・回復力）」の特徴と基本構造を解明したい。尚、このレジリエンスについては、概念の使われるレベルにおいて幾つかの定義がある。加藤 敏 (2012)⁽⁴⁾によれば、近年、レジリエンス研究における定義として、(1) ストレスに対する「防御因子もしくは、回復因子」とする考え方があり、その特性としては、①生物学的次元とパーソナリティの次元からなる個人特性、②家族・社会などの集団特性とし、脆弱因子、危険因子の対局にあるものとする考え方と、(2) 困難な状況、または、病気にたいする跳ね返し・回復力によるポジティブな適応力をもたらす力動的過程として防御因子を包摂する考え方がある。

本論では、(2)の定義を準拠枠とする「逆境力（＝逆境から立ち直る力）」、「回復力（＝元気を取り戻す力）」として知られている力動的過程としての「レジリエンス」の視点を手がかりに、震災の被災者が自らの経験を生きる力としての「経験知」がもたらすレジリエンスの構成要件について貴重な〈語り（事例）〉の検討をとおして解明し、さらにコミュニティ支援の方法のあり方について述べる。

尚、本論文で用いる、〈経験知〉とは、多様な出来事をめぐる体験の総和としてその時代・社会文化の中で共有される経験であり、我々が自己を取り巻く環境（現実）との相互関係の中から学び得たく実感を伴う知恵及び知識〉の意味で用いることにする。

II. 当事者が自己の経験を語ることについての検討

1. 語り（物語／ナラティブ）(narrative) の意味をめぐって

本論で取り扱う、〈語りの記録〉の取り扱い方と関連する「物語／ナラティブ」について、『現代社会学事典』⁽⁵⁾では、以下のような解説（一部抜粋）がなされている。

社会学の中でも、次の2つの領域はとくに物語概念と関わりが深い。ひとつは臨床社会学と総称される領域だ。心理療法の一流派である物語療法（ナラティブ・セラピー）の影響を受けながら、この領域では諸種のケアの現場における現実の構成について実践的な研究を蓄積している。そこでは制度や社会が想定する物語と個々人の物語とのずれや緊張が主題化される。

もうひとつはライフヒストリー研究の領域だ。この領域では、ある社会を生きる個々人の人生についての語りを丁寧に聞き取ろうとする。そのなかで個々人のヒストリーが、ストーリーとしてもとらえ返されていくのである。そこでは、人生の語りそれ自体が人生を構成・達成していく過程が主題化される。 [浅野智彦(2012) p.1264]

ここで、「物語／ナラティブ」の具体的臨床的(フィールドワーク)における活用領域(方法)として、「ナラティブ・アプローチ」と「ライフヒストリー研究」を提示している。本研究では、ライフヒストリー研究の展開としてのライフストーリーの視点から、レジリエンスの構造について検討することにしたい。

その為の、前提となる、ライフストーリー概念について「現代社会学事典」⁽⁶⁾(2012)における「ライフストーリー(life story)」の項目(一部抜粋)を以下に紹介する。

個人が、自己やこれまでの自分の経験や人生についてオーラルで語るストーリー、ならびにそれを主な資料とする質的調査の研究法のひとつ。ライフストーリーは、個人が出来事や経験、自己や人生に意味を与えることができるコミュニケーションの基本的な形式である。……(中略)……これらの特性は、これまで歴史的事実や社会的現実を明らかにする客観性が乏しく信頼性に欠ける資料と見なされてきたが、今日では、言語の資料、ナラティブの構造、記憶の分節化、人生や生活が語られる文脈、コミュニティのディスコースとの関係など、個人がオーラルに自己や経験を表現する工夫や戦略などの多面的な局面に注意を向ける源泉となっている。ライフストーリー研究は、たんに既存の自己や現実の意味を解明するためのものではなく、コミュニケーションによって自己や現実が構成される過程をとおしての意味の産出が行われるという認識をもとにした研究方法である。 [桜井厚(2012) pp.1301-1302]

このように、今日、「語りの記録」や「ナラティブ」の分析をめぐる取り扱い方については、「質的研究法」の中でも議論されている事柄でもある。ここでは、ライフヒストリー研究の展開領域として、被災者(S氏)の語りが、自らのライフヒストリーを語ることから、ライフストーリーとしての経験の意味の再構成と、ライフストーリーとして語られたことの中から「レジリエンスの特徴と基本構造」の手がかりを得ることを試みたい。

なお、筆者は、ライフストーリーにおける個人のナラティブ(物語)として「語られた経験」と「語られない経験」については、当然のことながら「語り(ナラティブ)」の中に存在するものだと考えている。「人は、語れること(内容・事柄)を、語れる人(聴き手)に語る」ものであり、まさに、「ナラティブ」を聞き取る営みは、喩えるならば、ジグソーパズルのピース(断片)を丁寧に一つひとつつなぎ合わせて隠れている絵柄を再構成する根気の要る人間的営為なのである。そのため、本研究の前提となる取り組みにおいては、「語り得る為の相互の信頼関係」が、それまでの、1年以上に渡る関わりを通して形成されて来た経緯があることを明示しておきたい。

そして、「語りえない事柄（内容）」については、無理に追及することもなく、「語らない自由／権利もあること」について面接を開始する際に伝えた。

2. 語られた「ナラティブ」と援助理論としての「レジリエンス」の位置

レジリエンスをめぐる言説について、社会福祉領域においては、「ストレス・コーピング」や「ストレングス」、「エンパワーメント」等の概念を包括する概念として理論的検討が今後も望まれている。

本論においては、「バイオ（生物）・サイコ（心理）・ソーシャル（社会的）な存在」として、生物体である人間が持つ「自然回復力」や心理的な「ストレス・コーピング（ストレス対処）」、ソーシャルワークにおける「人と環境の相互作用」をも包括した統合的援助概念として「レジリエンス（回復力・逆境力）」を位置づけることができるのではないか。その為の試みの方法として被災地における被災者の「語り／ナラティブ」を手がかりとして考えてみたい。

ここでレジリエンスをめぐる援助論における基本的視点として、対象が個人（ケース）であれ、集団（グループ）であれ、地域社会（コミュニティ）であれ、それは、その暮らし（生活）の中核にレジリエンスを位置づけることで逆境を生き抜く（＝サバイバルする）「生の営みの困難を乗り越える力」であると考えてみたい。なお、「生の営みの困難」について、窪田暁子（2013）⁽⁷⁾は、最後の著書となった『福祉援助の臨床：共感する他者として』において次のように述べている。

一つは、これまでの生活問題と称してきた概念の内容に、単に日常生活あるいは家計ということに限定せずに、その人の人生の歩みのすべてを含ませていたことを明確に表現したいこと。もう一つは、その上でなお、生命活動と生涯の二つの次元の問題への援助活動をそれぞれ中心的に扱う医学や宗教などとは異なり、福祉援助は明らかに日々の暮らしの中に反映されている具体的な課題を主として取り扱い、日々の暮らしを成立させ、発展させてゆくことを目標としている仕事であること。このことを強調したい。 [窪田（2013）p.7]

これは、筆者が本論で取り上げるレジリエンスの考え方の基盤として、被災地に生きる人たちの「生の営みの困難」を正しく理解（アセスメント）し、援助を展開することを通して生活問題の解決もしくは緩和に向けたコミュニティ支援のあり方について考える手掛かりを得たいと考えた。それは、今後の「福祉援助（ソーシャルワーク）」をはじめ、医療・保健・看護・心理・教育等の分野において生活支援に関わる全ての政策立案及びケアの担い手の仕事を支える理論となる可能性を提供してみたい。

Ⅲ. 災害と福祉における援助実践の接点～災害福祉／災害ソーシャルワークを巡って

1. 本研究調査のフィールドについての被害概要

本研究のフィールドであるY町は、仙台市から南へ車で1時間30分程（常磐線ならば1時間程

だが現在も、途中までしか再開されず、最寄りの駅は津波で流されたまま不通になっている。現在も臨時の路線代行バスの運行が、住民の身近な交通手段となっている。尚、鉄道の再開は、5年後山側へ新駅を移設して再開される予定とのこと。

*** Y町の役場総務課資料(平成24年10月5日付け現在)を抜粋しておく。**

◎地震：発生日時平成23(2011)年3月11日(金)14:46頃

場所：三陸沖、震度：Y町震度6強、規模：M9.0

◎人的被害者数(Y町民)：

死者632人(遺体未発見の死亡届け16人及び震災関連死16人を含む)

行方不明者1人、重軽傷者9人(救急搬送分)、軽症者81人(救急搬送分)

◎家屋の被害(H24.10.5現在)

全壊2,217棟(うち、流出1,013棟)

大規模半壊534棟、半壊551棟、一部損壊1,138棟

◎火災数 なし(0件)

◎津波浸水区域(避難指示区域)の状況

(1) 海岸沿いの6行政区全域及び丘通り4が行政区の一部(2,494世帯、7,543人の区域)が津波により水没する。

(2) ほとんどの区域で水は引いたが、排水が低下したため、一部の田んぼは水が引いていない。しかし、幹線道路の大部分は、道路上のガレキを除去し通行できるようになった。

(3) ガレキ除去と遺体収容を同時並行に実施している。

2. フィールド(現地*Y町)との関わり方

筆者は、2012年10月から月1~2回の頻度で毎週末(土曜日)にY町の普門寺で開催される「Y町震災復興を考える土曜日の会」という津波被災を受けた住民が中心となっている当事者活動のミーティングに、震災コミュニティの復興と地域住民の活動を勉強させてもらうという意味での参与観察者(フィールドワーカー)としての位置づけで参加している。その中で、地域住民が参加する震災復興を考えるワークショップの支援や、今回の研究資料の一部となっている「震災の記憶とそこで暮らす被災住民の生活経験の記録化プロジェクト」を提案し、2013年10月から開始した。(現在も継続中)

3. 災害福祉(災害ソーシャルワーク)概念及びソーシャル・キャピタルとレジリエンスとの関係

「災害」(地震、津波、大雨による洪水、台風、竜巻、山火事や火災)と社会福祉、さらには、災害ソーシャルワークという考え方とレジリエンス概念との関係について検討してみたい。

災害福祉という用語は、西尾・大塚・古川等(2010)による『災害福祉とは何か』によって、知られるようになった。その中では、1995年1月の阪神淡路大震災での経験(知見)をベースと

して「災害福祉の概念」について西尾⁽⁸⁾(2010)は、次のように述べている。

災害福祉とは、災害を契機として生活困難に直面する被災者とくに災害時要援護者の生命、生活、尊厳を守るため、災害時要援護者のニーズをあらかじめ的確に把握し、災害からの救護・生活支援・生活再建に対し、効果的な援助を組織化する公私の援助活動である。

[西尾 (2010) p.8]

この概念定義の中で災害時要援護者とは、災害時に特別な支援が必要とされる状況下で、災害弱者であることを余儀なくされる「高齢者・しょうがい者・子ども・病気の療養者・妊産婦と乳幼児の他、外国人や旅行者等」の個別の状況（精神的・身体的なハンディキャップ）をもつ人々のことを意味する。レジリエンス概念の関連からは、「災害からの救護・生活支援・生活再建」という部分での関わりが検討の対象となる。

さらに、2011年3月の「3.11東日本大震災」におけるソーシャルワークの活動のあり方の検討をとおして、「災害時ソーシャルワークの理論化に関する研究」の成果報告書⁽⁹⁾(2012年10月)において、「災害ソーシャルワークの展開と方法」について次のように明示している。

災害ソーシャルワークは、災害が発生する前の減災・予防期、発災後すぐの救出・避難期、避難所生活期、仮設住宅生活（みなし仮設も含む）期、復興住宅や自宅再建期、コミュニティ再興期などの段階によって、ニーズが大きく変化します。災害の規模、災害の時期、災害の種類、災害の範囲などによって、また、地域の状況によって被害の現れ方はそれぞれ異なり、それに伴い、ソーシャルワーク支援の内容も異なります。その方法も総合的に用いますが必要に応じて強弱があります。災害時は、混乱した状況が続く中でのソーシャルワークの展開となりますので柔軟に対応する必要があります。

生活は**継続**します。生活は**現実的**でどなたの生活も断片化できない**全体的・連続的**なものです。そして、他者が代わりに生きることなどできず、被災された住民が**主体**となるものです。ソーシャルワークは、生活の原理・原則にもとづき、被災者を支援し続ける使命と役割があります。

[報告書 (2012) p.15]

この報告書において災害とソーシャルワークの関係における鍵概念は、継続し現実的でその全体的かつ連続的な意味を持つ「生活」への支援・再建・再生というものだ。そして、時期区分に応じた被災者及び被災地で発生するニーズへの対応がその内容を構成する。

従来、火災で死別した人々の急性悲嘆反応を研究したリンデマン (Lindeman, E) や、未熟児を持つ親への予防介入を中心に地域精神保健活動の研究を展開したキャプラン (Caplan, G) らにより、今日の危機理論 (crisis theory) の枠組みが次のようなものとして確立した⁽¹⁰⁾。

危機による情緒的不均衡状態は一定期間(1~6週間)しか持続せず、その回復過程に一定の原則がある。危機の認知の仕方(脅威、喪失、挑戦)およびそれに伴う感情表出や行動に特徴がみられる。危機には発達および状況により生じてくるもの(思春期、結婚など)と予測不可能なできごと(事故、離婚など)によるものがある。危機には、危険と好機の両面があり、危険に陥るか好転するかの決定的な転換点としてとらえて、タイミングよく介入していくことが重要である。 [社会福祉実践理論学会(2004) p.27]

このように危機理論をとおして「危機」と危機(クライシス)に直面した人間の「認知」の特徴と危機の持つリスク(予測可能な危険)とチャンス(状況を転換する好機)の両面について理解と介入の必要性が説かれている。

その意味では、「災害」への初期介入は、正に危機介入に他ならない。しかし、それは日々の生活(暮らし)基盤である人的(ヒト)・物的(モノ)・事柄的(コト)を含むコミュニティにおける関係のネットワークの崩壊とそれに伴う対象喪失体験へ対応が求められる。

その為、「社会福祉・ソーシャルワーク」が取り組むべき課題は、危機予防、短期の危機対応策から、中期・長期にわたる生活の支援・再建・再生・復興という経緯を貫く援助の中核として、被災者に内在化されているレジリエンスをエンパワーする視点が欠かせない。その為にも、人と環境の相互作用をつなぐ「ソーシャル・キャピタル(社会資本及び社会関係資本: social capital)」と呼ばれるものがレジリエンスにもたらす利点として強く関わっていることに注目しておきたい。

ソーシャル・キャピタルについては、『現代社会福祉辞典』⁽¹¹⁾(2003)(一部抜粋)によれば、以下のような記述がなされている。

近年、社会資本が注目されるのは、従来の意味としてではなくソーシャル・キャピタル論として、また、社会関係財というような意味で用いられる。このような社会開発論などで用いられるソーシャル・キャピタルは、1990年代頃から世界銀行などの議論を通じ広まったが、もともとは、社会学者などが唱えていたものである。「慈善、仲間、相互の共感、グループ内の社会的交流」といった社会学的定義から始まり、「個人に信頼や規範、ネットワークといった目に見えないが成長や開発にとって有用な資源で、経済的資源と同様、計測可能かつ蓄積可能が資本として位置づけたもの」といった説明がなされる。 [秋元・大島・芝野他(2003) p.189]

つまり、ソーシャル・キャピタルを「環境」としてとらえた場合、従来は、自然環境・社会的インフラストラクチャー・制度資本や公共財として理解されていたが、社会学領域におけるソーシャル・キャピタル論の展開をふまえて、今日では、ソーシャル・キャピタルには、「信頼・規範・ネットワークという目に見えない成長や開発に有用な資源」としての意味が重要性を帯びてきている。

さらに、ダニエル・アルドリッチ(Aldrich, D. P)(2012)⁽¹²⁾は、彼の著書において震災復興と

社会資本（Social Capital）の関係について関東大震災（1923年）や神戸の阪神淡路大震災（1995年）、さらに、インド洋の津波被災（2004年）、ハリケーンカテリーナ（2005年）の4事例の分析を通して、ソーシャル・キャピタルとしての「地域住民のネットワーク」こそが、災害復興速度の違いをもたらしていたことを述べている。さらに、レジリエンスの構築についても、以下のよう

この著書において、私は、個人や個別のレベルではなく、危機の後、積極的に連携された適応へと向かうように働きかけ、近隣や、区域、又は地域の能力に焦点を当てる共同体としてレジリエンスを定義する。レジリエンスとは、災害などの様々な危機的状況を乗り越える、その為の効果的な関わり方と調整された努力と協働的な諸活動、そして、効果的で効率的な回復に向けて取り組む近隣地域社会の潜在的な能力（a neighborhood's capacity）のことなのである。

[Aldrich, D. P (2012) p.7 : (結城俊哉訳)]

このように、災害被害からの復興・再建を起動する力としてのレジリエンスとソーシャル・キャピタルの関係についてみるならば、近隣地域コミュニティにおける人と人とのつながり（ネットワーク：絆）の持つ潜在的な能力が、レジリエンスを構成する重要な基本要件であることについて、ここで確認しておきたい。

IV インタビュー調査の実施と展開

1. 手続と方法

- * 研究倫理申請手続の配慮については、筑波大学人間系の研究倫理申請の許可を得た。
- * インタビュー協力者としての同意を確認した。

2. 事例検討：被災地で生きるS氏の「生活経験の語り」の記録（一部抜粋）

1) S氏のプロフィールとインタビュー実施状況について

<ul style="list-style-type: none"> ・名前：S氏（男性）・年齢：52歳（昭和36年5月） ・家族構成：震災前（実母+弟+本人：3人家族）⇒震災後（同様） ・現在の居住地（Y町・現地再建：第1種危険区域内） ・インタビュー記録 （インタビュー方法は、「半構造化面接法」：インタビューガイドは、参考資料参照） （尚、この記録は、ICレコーダーの録音記録からインタビュー内容を再構成したものである。） ・インタビュー実施日時 （第1回：11月2日 13：30～15：00）（90分） （第2回：12月8日 13：30～15：00）（90分） ・記録構成資料（筑波大学「3.11震災の記録化プロジェクト」チーム記録より）

(注) 「語り」のインタビュー記録及び分析作業として、本論文への抜粋掲載については、本人からの了解を得た後、語りの原型（基本骨格）を残しつつ、個人を特定できないようにデフォルメ加工を施した。また、S氏の確認を受けた発言内容と「意味付けコード」を「語り」の区切り及びパラグラフの最後に（ ）内にて明示した。今回は、自己体験の語りを中心としたインタビュー後半（第2回目）の部分の「語り」からの抜粋を検討資料として採用した。

問：それから、3.11以後のSさんの心境については？

そうですね。最初の年(2011年)はそれなりに避難所から仮設住宅、個々の家族との自宅の再建、生活基盤を固めて、1年後には、ようやく生活を始めたのですが、仮の暮らしの場としての不安定さを抱えながらの安定です。これは、「偽りの安定!」と呼ぶしか無いものなんです。皆、不安なのだけれど、これからの生活の見えづらさがあり、何となく、あまり先の事を考えないようにして、今を楽しもうという感じになっているんです。(未来の生活不安への防衛機制：刹那的な生活)(a)

そして、現実への妥協なのかもしれないけれど、今の生活は仮のものなんだけど、それを意識しないようにして贅沢しなければこのままでもいいかな、今はゆっくりして、見たくないものを見ないままでいる状態、考えたくない心境なんです。(仮の生活への妥協と現実の否認・回避の心理)(b)

つまり、なんとなく皆、仮設住宅のこのままの生活で…そんな傾向が強くなっているんですよ。でも、次の変化の時には、誤魔化せない…今は、未来の不安を見ないようにという生活の仕方になっているように感じます。とにかく、疲れて、休みたいという感じが被災者の中にあるんですよ。(仮の生活への不安と疲れ、休息への欲求)(c)

それから、今は、さまざまな不安や不満に蓋をして取り敢えず暮らしている状態…そうなんです。だから仮設住宅の退所の期限が示された時は、かなり慌てるのだと思うんですよね。とにかく、精神的な疲れかな…。腰を下ろすと立ち上がれなくなってしまうんですよ。立ったまま休めないと…次に歩き出せなくなるのに…。(被災者の中の再建復興へのジレンマ状態)(d)

でも、何となく、このままの仮設住宅生活でもいいやと言う人も増えているんですよ。今の日常を享受する。嫌なことは先送りにしたい。現状を打破するというパワーが弱まっているように思うんです。町が何とかしてくれる…住民自身が思考停止状態に追いやられているのかもしれない。町側の思惑の中に…。住民の心境としては、震災直後は、思い悩んだのだから、今は、考えたくない、この生活も贅沢しなければこのままでもいいかなという受け止めがあるようですよ。(現実への妥協と思考停止の状態)(e)

仮設住宅から出られる人と出られない人の中でも、今を、一時的なオアシスとして受け止め始めているのかも…。動けない者、高齢者の人達の中で、…仮設の中で自閉している、引きこもっているのかもしれない。(現状の生活への妥協と引きこもり・自閉的生活への問題意識)(f)

問：Sさんの中で、3.11の震災で失ったものについては、…

第一は、物質的に自宅の家財と預貯金ですかね。今は、物(家財)を新しくするために、貯金

を取り崩すことになっていますし…、**(失ったものとしての家財と預貯金) (g)**

それから、精神的に失ったものというのは、実は、あまり感じていないんですよ。何故だろうかと思うと、震災（2011.3.11）年の3年前に、肺がんの手術をしたんです。その頃が自分にとっては生きるか死ぬかの瀬戸際で手術して、抗がん剤治療してその時が自分としては本当に、必死でした。その時の喪失感が大きかったという経験をしていたことがあります。その後、震災の半年前に親父が亡くなりました。**(人生、最大の危機としてのがん闘病生活・父親の死等の喪失体験) (h)**

そして、震災・津波（3.11）が来て、さあどうしようか…ということで、「これからは、自分がやらなければならない」という自分の中でやるべき気持ちに火がついて…がんの再発の心配がなくなったこともあり、この機会の中で、日々動くことで、前に向けて生きる意欲に気持ちが転嫁した、つまり、3.11の中で、地域や自分の挑戦する課題を引き受けたことが…前に進むエネルギーになったんですかね。**(人生のミッション（自分がやるべき使命）を発見し、前向きに挑戦する気持ちへの転嫁) (i)**

問：3.11震災前の暮らしについては。

僕は、昭和30年代生まれです。笠野地区です。ここでは、三代経つとようやく地域住民になれるんですよ。この地域は、以前は、外から住民が流入してくる地域でした。僕の子どもの頃は、ですけど…。最近、就学する子どもがいない少子化の地域で…そして高齢化の影響でしょうか？若い人は、仙台の方へ行ってしまう、核家族化が進んでいるのでしょうかね。この地域でも高齢者の津波被災者が多く出たんです。昔は、苺の栽培が流行って高値で売れて、苺御殿ができていたんです。長閑（のどか）ない場所だったんです。地域の子どもは、保育園に行くこともなくて遊んでいたんです。震災の後、同級生と会うことができました。他の地域で生活している長男以外の次男、三男は、地域の外に出るからね…。**(子どもの頃の思い出とコミュニティへの思い) (j)**

震災後に（同級生達）再会することが増えました。高校生は、町の中で見かけないね。この地域は、教育熱心な風土でもなくて…この街は、仕事、学校が終わると家に帰るだけの場所だったんです。地域近所で集まるという関係は無かったですね…。仙台市地域の住民は教育熱心なんだけど、そこから遠くなると勉強しなくなりますね。この地域は、もともとそれほどのんびりしていて勉強しなくても高校には入れる状況でしたし…、自分も勉強はしていなかったですね。農家の親は、長男に跡継ぎさせるために甘やかしていましたね。

青年クラブの活動については、高校生の頃に参加していました。それなりに、地域（坂元）の友人が増えていましたね。ジュニア・リーダーの研修を青年の家で受けたことがきっかけですかね。今もボランティア・サークル（虹）がありますね。その頃は、子どもの数も多かったんです。**(生まれ育った地域の特徴：仙台への通勤通学のベッドタウン／のんびりとした風土) (k)**

僕は、中学校は野球部だったんですよ。Y町は、朝野球が盛んでした。ソフトボールも盛んです。

僕は、35歳までは、朝野球に参加していたんですよ。青年クラブは、商店主・工場の経営者の子どもの集まりだと思っていたんです。でも、子どもたちは、高校になると仙台での活動が中心になるんですよ…。その頃の中学校が荒れているという印象は、なかったですね。

その頃は、仙台一高(進学校)に行く仲間はいなかったです。本当に、勉強しないでのんびりしていたんです。僕は、TH学院の中・高校に行ったんですが…のんびりしてました。大学卒業後は、文具を扱う会社に勤めていたんです。その後、こっちに帰ってきて、自動車工場の部品の会社に勤めました。そこは、4～5年勤めて、そのあと人材派遣会社を立ち上げて、会社を始めました。一攫千金を夢見ていたんですが…。(笑い!)そこで、12～13年勤めていたんです。その後、ホームヘルパーの資格をとって、45歳の時に会社を辞めて、介護、ホームヘルパーとして働いて、2年後にがんが判り、その3年後に震災(3.11)にあったんです。

その頃から、人材派遣の仕事が縮小傾向でしたから…。Y町にも老人ホームができて働こうとしたら、身体を壊したんです。今は、がん保険の保証金で何とか生活できています。

3.11後の生活の変容は、3年間のがんの闘病生活の後で、やるべきことが降ってきた感じです。(子ども時代から今日までのライフストーリー(進学と転職)と自分のミッション(使命)の発見) (l)

この街への愛着は、自分の区(小さなコミュニティ)の一体感が強いんです。この震災では、津波被害は、浜側が中心で、その地(K区)を残すことで、危険地域(第1種)で復興できないかなと、言われています。敬老会は、やっているみたいです。家を建てることについては、津波が怖くて戻れない人たちとそこで住みたい人がいるんです。(地域への愛着と生活への葛藤状況の自覚) (m)

今年(2013)も3月11日には、(鎮魂のための)竹灯籠の祭りをしました。風がとても強くて、寒くて大変でしたね。被災地の1年目にやっていた生活が、2年目にも同じ繰り返しになっている。震災復興が進まないために、実は悶々とした状況が続いているんですよ。来年度(2014年)のはじめには、町役場への町民の声として要望書を作って復興ワークショップの内容を踏まえて提出する計画なんですよ。それは、参加してくれた地域住民への成果報告となると思うんですよ。(町の進まない復興行政施策への不満と地域住民によるソーシャル・アクションへの期待) (n)

問：3.11大震災の経験をとおして、得たことは何でしょうか？

そして、今、ご自分の支えとなっているものは、何でしょうか？

そうですね。まずは、地域のコミュニティがより強固となった点、震災後の人とのつながりですね。さらに、役場・行政への関心と、つながりが広がったことかな。それと、地域社会、コミュニティというのでしょうか…そこへの関心が広がって、地域で今まで当たり前だと思っていた文化・行事(お祭り)なんかがとても大事なことに思えてきたことかな。そして、普門寺という地域住民の集える場を得て「当事者仲間(土曜日の会)」のメンバーとの出会いが生まれたことですかね。(郷

土への愛着・仲間の発見・共有する目的・ソーシャル・キャピタルとしての絆の発見) (o)

そして、これは、個人的な事かもしれませんが、震災の3年前にがんを患って自分の人生が終わったと思いながら闘病して幸いにも生命を拾ったという体験と、さらに父親の死を経験してから半年経ってホッとした頃に3.11大震災でしたから、今の自分を根底で支えていることは、震災という衝撃的な経験をした今、「自分がやるべきことと向き合うこと、向き合わざるを得なくなる」状況の中で、考え込んでいるよりも行動せざるを得ない状態に置かれたことによって自分のこれから取り組む、挑戦するべきことができ何となく強くなって来たように思います。

最後に、津波で流された故郷を取り戻すというなんだか大袈裟かもしれませんが、今は、ミッションというか使命を得たことですかね。(自分の強さの自覚の原点としてのがんとの闘病生活・父の死の乗り越えと震災に向き合いながら故郷の復活というミッションへの覚醒) (p)

(どうも、ありがとうございました。)

3. 「語り (ナラティブ) の経験」の意味付けコードへの命名によるカテゴリー化作業による レジリエンスの構成要件 (中範囲レベル) の抽出

* KJ法の枠組みを採用し、サブカテゴリー及びカテゴリー化 (命名作業) については、被災当事者 (S氏本人) との確認を取りながら検討作業を進めた。

カテゴリー	サブ・カテゴリー	意味付けコード
被災地における生活の 再建・復興への課題と 向き合う (A)	生活不安と現状否認・妥協・自閉 (防衛心理) の仮設所生活の抱える問題意識	(未来の生活不安への防衛機制: 刹那的な生活) (a) (仮の生活への妥協と現実の否認・回避の心理) (b) (現状の生活への妥協と引きこもり・自閉的生活への問題意識) (f) (仮の生活への不安と疲れ、休息への欲求) (c)
	生活再建・復興へのジレンマと思考停止	(被災者の中の再建復興へのジレンマ状態) (d) (現実への妥協と思考停止の状態) (e)
	町の復興施策への不満	(町の進まない復興行政施策への不満) (n)
危機状況の乗り越えがもたらす自己効力感の涵養体験 (B)	危機状況に直面した体験から自己認識の深化	(人生、最大の危機としてのがん闘病生活・父親の死等の喪失体験) (h) (自分の強さの自覚の原点としてのがんとの闘病生活・父の死の乗り越え) (p)
故郷復活へのミッション (使命) の自覚化 (C)	故郷復活へのミッション (使命) の自覚化	(人生のミッション (自分がやるべき使命) を発見し、前向きに挑戦する気持ちへの転嫁) (i) (震災に向き合いながら故郷の復活というミッションの覚醒) (p)
思い出を通して郷土への愛着と地域が抱える課題と自己の使命感 (生きがい) の意識化 (D)	コミュニティへの思い出と郷土愛の確認	(子どもの頃の思い出とコミュニティへの思い) (j) (生まれ育った地域の特徴: 仙台への通勤通学のベッドタウン／のんびりとした風土) (k) (地域への愛着の自覚) (m)
	進路をめぐるライフヒストリーと地域への使命と葛藤の自覚	(子ども時代から今日までのライフヒストリー (進学と転職) と自分のミッション (使命) の発見) (l) (地域への愛着と生活への葛藤状況の自覚) (m)
仲間との出会いとソーシャル・キャピタル／ソーシャル・アクションから絆 (きずな) の発見 (E)	郷土愛と仲間との目的共有体験	(郷土への愛着・仲間の発見・共有する目的) (o)
	ソーシャル・キャピタルとしての絆 (きずな) とソーシャル・アクション	(地域住民によるソーシャル・アクションへの期待) (n) (ソーシャル・キャピタルとしての絆の発見) (o)

以上、語られた「ナラティブ (物語)」の内容について「9つのサブ・カテゴリー」と「5つのカテゴリー (A～E)」の抽出と命名作業を行なった。

次章において、これらのカテゴリーから導かれるS氏のリジリエンスを支える構成要件について検討・整理してみたい。

V. 被災当事者の「語り (ナラティブ)」にみるリジリエンスの構成要件

ここでは、危機介入とリジリエンス概念の共通性と被災当事者の「語り (ナラティブ)」から描き出されたリジリエンスの構成要件の位置について整理しておきたい。

1. ソーシャルワークにおける危機介入とリジリエンスの概念の共通性

危機介入 (crisis intervention) とリジリエンス概念の共通性について検討するために、その前提としてのクライシス (危機) への介入理論について整理しておきたい。

結城 (2007) は、以前、「障壁 (バリア) に立ち向かう危機介入方法に関して、3つのアプローチ視点」⁽¹³⁾ として以下のような提案をした。

- 視点1. バリア (障壁) への制度・施策的対処法を含む社会環境調整活動
 - ⇒ (方法) 法律・制度・施策的且つ公的な介入支援
- 視点2. クライアントの「耐性・可能性・強さ・潜在的能力」をエンパワーする個別支援活動
 - ⇒ (方法) 教育的関与、カウンセリング、ケースワークという個別支援
- 視点3. コミュニティ (地域) の対人ネットワークを支援する地域及び集団活動。
 - ⇒ (方法) 当事者活動と呼ばれる「自助グループ (SHG: Self-help Group)」とコミュニティ・ワークによる地域における相互支援ネットワーク作り等の側面的地域支援活動

この危機介入の視点は、「リジリエンスにおける防御的 (プロテクトティブ) 研究」としてウンガー, M. (Ungar, M.)⁽¹⁴⁾ (2013) らが提唱したソーシャルワークにおけるリジリエンス概念の定義に引きつけて検討するならば、従来までの心理学・精神医学領域の個人的要因を極めて重視するリジリエンス概念に対して「エコロジカル (生態学的な社会環境) の視点」におけるソーシャルワークの役割として、「環境とのナビゲーション (誘導・導き)」、そして、「ニゴシエーション (交渉・調整作業) という視点」を導入することで、リジリエンスをソーシャルワークの担うべき重要な概念として提唱したことと同様な見解に導かれている。

つまり、危機への3つの介入の視点は、「環境」(制度施策と社会的資源状況) に対して、地域における援助機関とクライアントへ働きかけるナビゲーション作業であり、さらに、危機に直面した「個人 (家族も含む) の当事者の生活問題・課題」へのニゴシエーション等の総合的で全面的な解決・緩和に向けた地域における、まさに個々人の「リジリエンス」を起動させる基盤を形成しているとも考えることができるのではないか。

2. S氏のナラティブ (語り) から描き出されたリジリエンスの5つの構成要件

それでは、S氏の「語りの記録」の中から発言をまとめた「中カテゴリー」の内容を検討する

ことで彼を支えているレジリエンスの構成要件（1～5）を試案として以下に提示したい（図1）。

構成要件1：

(B) 危機状況の乗り越えがもたらす自己効力感の涵養体験＝以前に危機（逆境）を乗り越えた経験知を持っている。＝自己効力感及び自己肯定感がもたらす成長

構成要件2：

(D) 思い出を通して郷土への愛着と地域が抱える課題と自己の使命感（生きがい）の意識化＝コミュニティのもつ「郷土の文化・習俗・祭り・歴史」の大切さへの意識的愛着を持っている。＝地域文化（郷土）への愛着心の自覚化

構成要件3：

(E) 仲間との出会いとソーシャル・キャピタル／ソーシャル・アクションから絆（きずな）の発見＝被災当事者としての共通体験と目的を共有する仲間との出会いがあった。＝当事者である仲間意識（連帯感）の共有化

構成要件4：

(A) 被災地における生活の再建・復興への課題と向き合う＝ソーシャル・キャピタルとしての地域の絆（きずな）を実感する。＝ケアする同体意識の獲得

構成要件5：

(C) 故郷復活へのミッション（使命）の自覚化＝直面する地域及び自己課題への積極的関与の態度が生まれた。＝自己のミッション（成すべき使命・役割）の意識化

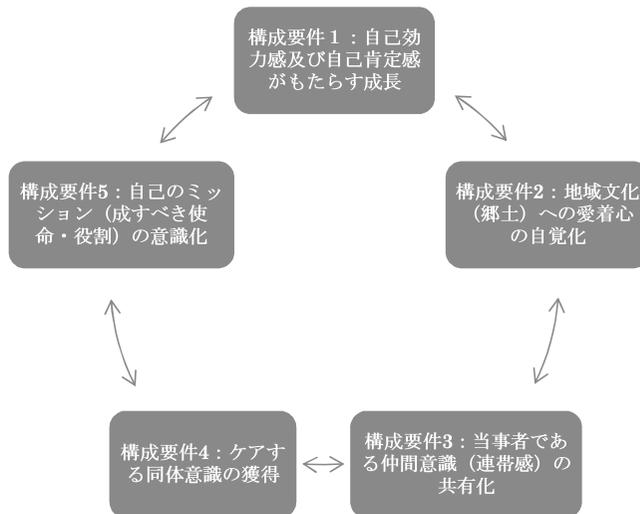


図1 S氏の語りから抽出したレジリエンス、5つの構成要件

それぞれの構成要件は、単独でバラバラに存在しているものではなく、相互にリンクする力動

的な関係性をもつものだと理解することで、レジリエンスが実感として可視化されてくるのだと考えてみて欲しい。

VI. 「希望」としてのレジリエンスの本質とは

～被災コミュニティで生きる人たちを支援するために～

最後に、危機的状況下におけるレジリエンスの本質とは何かについて検討してみたい。

1. 「希望の物語」としてレジリエンスを理解する。

被災した人々と関わる場合、絶望的な危機状況から「希望」へ向かう態度の涵養そのものがレジリエンス構築の本質と関わるのだと考えたい。その意味で、『希望学』の見解を手がかりとしてレジリエンスの構成要件を機能させる視点について検討してみよう。『希望学』の提唱者である玄田有史(2010)⁽¹⁵⁾は、『希望のつくり方』の中で「希望をつくる8つのヒント」について次のように述べている。

1. 希望は「気持ち」「何か」「実現」「行動」の4本の柱から成り立っている。希望が見つからないとき、4本の柱のうち、どれが欠けているのかを探す。
2. いつも会うわけではないけれど、ゆるやかな信頼でつながった仲間(ウィーク・タイズ)が自分の知らなかったヒントをもたらす。
3. 失望した後に、つらかった経験を踏まえて、次の新しい希望へと、柔軟に修正させていく。
4. 過去の挫折の意味を自分の言葉で語れる人ほど、未来の希望を語るができる。
5. 無駄に対して否定的になりすぎると、希望との思いがけない出会いもなくなっていく。
6. わからないもの、どっちつかずのものを、理解不能として安易に切り捨てたりしない。
7. 大きな壁にぶつかったら、壁の前でちゃんとウロウロする。
8. 「」

この8番目の空欄には、ご自身の経験をふりかえりながら、希望をつくるヒントを自分でみつけて書き入れてみてください。 [玄田(2010) pp.214-216]

この希望学からの8つの提案を、S氏の語りから抽出したレジリエンスの5つの構成要件との関係について検討してみよう。まず、当事者本人が、今、置かれている現状を受け止めながら、自分の人生経験の中で直面した危機的状況(S氏の場合には、闘病生活や父親の死をめぐる辛い経験)をくぐり抜けて、自分自身がやるべきこれからの使命(ミッション)についての自覚化がみられた。さらに、その実現に向けてY町役場との復興計画の交渉に臨みながら、自ら主体的な行動を起こしたこと。さらに、自分が育った地域(コミュニティ)への愛着と復興への決意と気持ちを同じくする「仲間とのつながり(絆)」を実感したこと。そして、自分と同じように不安定な状況におかれたまま前に向かって歩み始めることが出来ないでいる仮設住宅で生活する人達

への理解と配慮など、人間としての幅広い観点から直面する問題状況を総合的に理解しようとする人格的な強さを感じとることができる。

その意味で、直面している悲劇的現実と呼ばれる「絶望の物語」を「希望の物語」へと書き換える（=変換する）ことのできる力そのものが「レジリエンス」の本質なのかもしれない。つまり、人は、キルケゴールの「死に至る病」としての「絶望」と対峙しながら、その中から、「希望」と呼ぶことのできる「光」を探し求めてしか生きていけない存在なのだと言えないだろうか。

2. 今後の課題～レジリエント・コミュニティとは何か～

最後に、災害時における危機介入から生活の復興・再建過程において災害福祉支援（災害ソーシャルワーク）に求められていることについて、これまでの検討作業を通して見えて来た本研究の今後の課題について述べておきたい。本論の目的は、生活復興・再建に向けて立ち上がり、ゆっくりとだが確かな歩みを始めている被災者からの「生活経験の語り」の記録を分析検討し、「逆境力・回復力」と呼ばれるレジリエンスの構成要件とその本質について試論を提示することであった。

そして、本研究の今後の課題は、被災者の個別事例におけるレジリエンスの特徴を抽出し描き出す中で、現在進めている各事例（語りの記録）の検討から、コミュニティで暮らす人々の中に通底する共通性（構成要件）を抽出することである。そのことを通して、レジリエンスが震災後コミュニティを再構築する力となりうる「レジリエント・コミュニティとは何か」という命題に応える実践的且つ研究的営為なのである。

（本研究は、筑波大学・「震災復興・生活支援プロジェクト」（代表：手打明敏）及び、科学研究費助成事業「挑戦的萌芽研究：[JSPS 科研費（25550100）]」（代表：結城俊哉）の研究助成を受けたものである。）

引用文献一覧

- (1) Selye, H. (1956/1976) *The Stress of Life* (revised, edition). New York. McGraw-Hill Book Co. Ltd. (=1988, 杉靖三郎、田多井吉之介、藤井尚治、竹宮 隆 訳『現代社会とストレス』法政大学出版会)
- (2) Erikson, E. H. (1950/1963) *Childhood and Society (second Edition: revised and enlarged)*. New York: W. W. Norton & Company Inc. (= 1980, 仁科弥生訳『幼年期と社会（Ⅰ）（Ⅱ）』みすず書房)
- (3) 宅 香菜子 (2010) 『外傷後成長に関する研究—ストレス体験をきっかけとした青年の変容』風間書房
- (4) 加藤敏 (2012) 「現代精神医学におけるレジリアンスの概念の意義」／加藤敏・八木剛平編『レジリアンス：現代精神医学の新しいパラダイム』金原出版 pp.9-10
- (5) 見田宗介（編集顧問）大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編 (2012) 『現代社会学事典』弘文堂
- (6) 見田宗介（編集顧問）大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編 (2012) 『現代社会学事典』弘文堂

- (7) 窪田暁子(2013)『福祉援助の臨床』誠信書房
- (8) 西尾祐吾・大塚保信・古川隆司編著(2010)『災害福祉とは何か：生活支援体制の構築に向けて』ミネルヴァ書房
- (9) 公益財団法人みずほ福祉助成財団平成23年度社会福祉助成事業(2012)：「災害時ソーシャルワークの理論化に関する研究」研究成果報告書，社団法人日本社会福祉士養成校協会
- (10) 日本社会福祉実践理論学会編(2004)『新版 社会福祉実践基本用語辞典』川島書店
- (11) 秋元美世・大島巖・芝野松次郎他編(2003)『現代社会福祉辞典』有斐閣
- (12) Aldrich, D. P. (2012) *Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery*. The University of Chicago Press.
- (13) 結城俊哉(2007)「第2節 アセスメントのための生活論」，植田章・結城俊哉編著『社会福祉方法原論の展開』高菅出版，pp.91-93
- (14) マイケル・ウンガー (Michael Ungar) 氏の基調講演(2013)「ソーシャルワーカーこそがリジリエンスを育てる」／『ソーシャルワーク学会誌』第26号，日本ソーシャルワーク学会，pp.5-22
- (15) 玄田有史(2010)『希望のつくり方』岩波新書

参考文献一覧

- Beverly Raphael (1986) *When Disaster Strikes: How Individuals and Communities Cope with Catastrophe*, Basic Book Inc. Publishers, New York. (= 1989, 石丸 正訳『災害の襲うとき：カタストロフィの精神医学』みずさ書房)
- 日本学会会議・社会学委員会・社会福祉学分会(2013)『提言：災害に対する社会福祉の役割—東日本大震災への対応を含めて—』日本学会会議
- やまもと民話の会(2013)『語りつぐ・小さな町を呑みこんだ：巨大津波』小学館
- 結城俊哉(2013)『ケアのフォークロア：対人援助の基本原則と展開方法を考える』高菅出版